

平成 28 年度
総合教育会議議事録

平成 29 年 3 月 3 日

泉大津市

平成29年3月3日（金）午前10時00分より泉大津市総合教育会議を泉大津市役所3階大会議室に招集した。

出席委員等

市長 南出 賢一
教育長 富田 明徳 教育長職務代理者 藤原 洋子
教育委員 西尾 剛 教育委員 池島 明子

出席事務局職員

総合政策部長 迫間 一郎 総合政策部理事 森川 剛史
総合政策部次長兼企画調整課長 虎間 麻実 企画調整課長補佐 川崎 直也
教育部長 朝尾 勝次 教育部次長兼生涯学習課長 丸山 理佳
教育部参事兼指導課長 向井 説行 教育総務課長 木村 浩之
教育総務課長補佐 中平 美和子 教育総務課総括主査 堀内 啓史

意見交換

- (1) 本市教育の今後の方向性について
- (2) 中学校給食について
- (3) 読書量日本一のまちづくりについて

会議の顛末

◎教育部長（朝尾勝次）議題に入ります前に、市長の方から「本市の教育についての思い、また考え方」についてお話をいただきたいと思いますが、市長、よろしいでしょうか。

◆市長（南出賢一）わかりました。

◎教育部長（朝尾勝次）では、どうぞよろしくお願ひいたします。

◆市長（南出賢一）大事だと思うのは、泉大津の教育を良くしたい。それは皆さんも同じ認識だと思いますが、どう良くしたいかは、中身を擦り合わせていかないといけない。もう一つ、良い教育、質の高い教育をやるとなつた時には、なぜそれをやるのか、背景になる考え方を擦り合わせることが、大変重要なことだと思う。

先日、予算査定の中で、教育の現場の先生方から、意見をいろいろとお聞きした時に、「この10年間で、泉大津の子どもの人口はどれくらい減ったか。」と聞いた時に、先生方は知らなかった。ここは、とても大事なポイントだと思った。

まず、時代背景という共通認識を持っていない中で、ただ「質の高い教育をやろう、やろう」だけでは、駄目。何が言いたいかというと、私は時代をこのように捉えている。例えば、江戸時代で言うと、所信表明でも書いていますが、皆さんは私の言うことが正しいのではなく、一度自分の心とか頭で置き換えて一緒に考えていただきたいと思う。

幕府というのは国、藩は地方自治体、藩主は市長です。昔は幕府から交付金が下りてこない、更に参勤交代で諸藩はお金を使わされていたのは、幕府に歯向かえないように、諸藩、自治体は弱体化されていた。では、藩がどのように食べていくかとなつた時に、自分達でお金を稼がないと、諸藩は食べていけず、インフラも維持出来ないので、産業育成に徹底的に力を入れていた。

しかし、産業の育成というのは非常に難しく、教育に力を入れた。藩校もあれば、私塾、寺子屋を徹底的に推奨し、江戸時代の当時の日本の教育というのは、世界のトップ水準と言われていたのはご存知でしょうか。識字率でいうと、ヨーロッパのフランスでは20%切るくらい、日本では80%近くであったと言われ、いろいろな史実が残っている。そう考えた時に、徹底的に教育に入れ、藩主を支える家老クラス、市でいう理事者、教育者、優秀な経済人、商業者といった人を徹底的に育てる、藩を維持出来るように教育を行っていた。それを鑑みた時に、果たして泉大津でそういう考えに立って教育が出来ていたかというと、私は冷静に見ないといけないのではないか、まず、こういった背景的認識は、あったのか。例えば、この10年くらいの間に、人口が三千人減っています。内訳を見ると、子どもが三千人、生産年齢人口15歳から65歳が五千人減っています。そして高齢者人口が、五千人増えている。着実に、まちの担い手が大都市、東京に行っているということを考えた時に、まちの担い手をどうするか。人口が減ったら、当然経済も、泉大津のこのまちを担いたい、住み続けたい、離れてても気になるという子どもをどのように育てるのかという背景を考えた上で、どういう教育をするのかということを、よく考えていかないといけないのではないかと思う。郷土愛を育むとは、言うは易しですが、どうしたら、この泉大津で住み続けたいという子どもが如何に増えるのか、そこを徹底的にこれから皆さんと、本気で考えていく必要があるのではないかと思います。そのためにどういった教育が必要なのか。私自身は、一つの確信を得ています。2010年から若者を、春と夏に4ヶ月住み込みも含めて、受け入れながら、人間教育を、志を立てて教育をする。自分の人生に向き合ってもらうという活動をし、これまで60数名受け入れてきた。その中で一つの確信を得ているのが、この人はこのまちのおかげで人生が変わった、あの人がいたおかげで心から成長が出来たと思える、過去トラウマだと思っていたことがあって今良かったと思える、あの人が居たお陰で、このまちのお陰で自分が心から成長出来たと思える子は、あのまちに、このまちに恩返しがしたいと、そういう気持が育まれるのであれば、自分が変わったから君達も成長出来

ると、後輩と指導してくれる。これは多分、クラブチーム、スポーツ団体で同じ事があると思う。学校のクラブの中でも、あそこがあったお陰で自分が成長出来た、そこに愛着が湧き、後輩指導を主体に。薩摩の郷中教育だったのですが、しっかりと志教育をしながら、一人の人生に向き合えれば若者は根付きやすい。その次に仕事があるということが大事であると思うのですが、一番素地というところが大事になってくると思う。そういうところをいろいろと意見交換しながら、泉大津は一体何が必要なのか、実際こういうことが出来ている、多分素晴らしい先生もいらっしゃると思うが、まず背景がこうだからこういうことをめざさないといけない、こういったことを大事にしないといけないということを、これから考えていかないといけないのではないかと感じている。話していくと何時間にもなるので、搔い摘んで時代認識をしないといけないが、小さい部分では、私は今、江戸時代の話をさせていただいた。

皆さん、これはご存知だと思いますが、第2次世界大戦以降消滅した国の数は、183。加盟国は193ですが、消滅した国、乗っ取られた国、海外政権等いろいろありますが、たった72年で、事実として数字が出ている。

私は毎年、海外へいろいろ行くが、日本は島国でこんな危機感のない国はない。先般はヨーロッパに行き、国がどのように生き残るか、どういった経済情勢になるか、将来予測をやりながら、自分達で将来どのようになるのか、どのように生きていくのかということを考える教育をやっているとすごく感じている。

逆に、皆さんにお聞きしたいが、「10年後、日本を取り巻く経済はどうなっていますか」、「社会情勢はどうなっていますか」ということを、仮説することは大事だと思う。きっとこういう世の中になるのならば、こういう力をつけるといけない、きっと教育指導要領の中にも入っていると思うが、まず、我々がそういった背景の認識を持つ事が大事である。

昨日、教育長と「ありがとうカウンター」の話に行きましたが、「幸せに生きられる子とはどういう子なのか」等いろいろ話をしましたが、そういう話もいろいろと出来たらしいと思う。

私もだが、皆さんも考えていただきたいのが、「なぜ自分はこうして生きているのか」、「何のために勉強をしているのか」、「今、泉大津を取り巻く情勢は」、「日本の情勢は」、「世界を取り巻く情勢は」等の世の中の情勢を知りましょう等、「未来はどうなるのか」、「仮説を立てられる力をつける」等、小さい範囲だけではなく、我々が認識をもつべきではないのかと思っている。

結論は、自分がやりたいことと、世の中から求められること、「私欲」というと自分のやりたいこと、「公欲」というと世の中が必要とすること、これから世の中が必要とする価値創造を一致させられれば、ありがとうと言ってもらえる。自分のやりたいことが、世の中が必要とすることであつたら、私欲と公欲を一致させた人は世の中から求められる。感謝の気持ちを持っている人は、「ありがとう」が返ってくる、仲間が出来る、応援してもらえる。自分のことや過去を肯定出来る人は、周りに流されず、主体的に生きられる。お陰さま等そういう気持ちを持っています。立ち位置を理解出来る人は、自分の活躍の場を自分で見つけることが出来る。こういったことを大事に考えながら、まず、我々大人がこういった認識を持つ必要があると考えている。

泉大津で教育をする上で最後に言っておきたいのは、義務教育を受けた時の着地目標を明確に持つべきではないかと思う。数値で表せるものと、表せないものがあるが、教育の目的は、精神的自立と経済的自立を考えた時に、泉大津で教育を受けて中学校卒業の段階では、例えば自立目標として、自分の進路は自分の意思で決めている、しっかりした夢や志を持っている、志を発表することが出来る、自分の弁当は自分で作ることが出来る、日本語と英語で自分の事をプレゼンテーションが出来る、泉大津の事を好きだと言える等、こういった自立目標が明確にあって、皆さんのが共通認識になっていると、

それに照らし合わせて、この子は夢から志に変わることで、どんな支援が必要であるのか、関わり方が変わる。そういうことを一つ一つ丁寧にやっていく事が、非常に重要な気が思っている。

(プロジェクト使用)

注目している数字があって、これは、自己肯定感で自分では良いところがあると思う。小学校時は、平成28年、約40%の子が、「自分では良いところがある」と思っている。中学校になると、20%まで下がり、激減である。

将来夢や目標を持っている児童・生徒は、小学校時、平成28年、70%の子が、夢や目標を持っているが、中学校になると、40%まで下がり、この数字は真摯に受けとめるべきではないかと、中学生になって世の中の事がいろいろわかつてきて、現実が見えてきたというのがあると思うが、この数字は人生に影響を及ぼす数字ではないかと思う。こういった数字を、しっかりと目標を定めて、泉大津で教育を受けたら、卒業時には自分の目標や夢等を自分の意志でしっかりと言えるという状態をどう作ってあげられるか。目的意識を持って学んでいる子は、力強く人生を歩んでいると思うし、どういう状態になつても幸せに生きていける力の一つになつていてると思う。そう考えた時に、学力を上げるのはとても大事であるが、一番根本となるこういったところに着目して、皆さんで教育を支えられるようなそういう内容を一緒に考えていいければいいと考えている。雑駁な話であるが、背景にある考え方・共通認識を持てるような、まずそこがスタートだと思ったので、こういった話をさせていただいた。いろいろと質問をしていただきながら、議論を深められればと思う。

(1) 本市教育の今後の方向性について

◎教育部長（朝尾勝次）委員の皆様、何かご意見等ござりますでしょうか。

◆教育長（富田明徳）今の市長の最初の発言の部分が、本市教育の今後の方向性、市長が考えている背景の話があったと思う。この分も含めて今回議論が出来たらいいと思う。

市長の方から、時代背景というか、今後の教育だけではなく、子どもが置かれている状況、今の子ども達が、大人になり、21世紀終わり頃まで生きていくと言われており、今後21世紀終わりまで生きていく子ども達、泉大津の子ども達が、どのように生き抜いていけるのかという意識を我々は持って、教育に携わらないといけない。暫く数年間だけやっていけるのではなく、生涯を通じて泉大津に住み続けて、生きていく子ども達を、育てていかないといけないという認識は、全く市長と同感と思っています。

少し残念なことに、今までの事を聞かれると、学校教育はどうしても、文部科学省から教育委員会という縦の系列で、方針が下りてくる。最近になり地域との連携を言われるようになって、新たな方向性が出来てきて、これまで私が若い教員だった時に比べると、地域の意識はすごく高まっているのではないか、教員自身も地域と一緒に連携してやつていかないといけないという認識が非常に高くなっていると認識している。今後、先生方も教員としていろいろなところを経験し、その度に自分自身が、どちらかというと化学変化しなければならないと思っている。そういう中で、時代に合わせて化学変化できる子どもも、いろいろな状況に合わせて、新しい事を学んで、化学変化出来る子どもを育てるにはどうしたらいいかというのが、私の時代認識というか、意識というかイメージを漠然と持っている。

◆市長（南出賢一）私も同感なのですが、どういう時代になるのかということを、予測は様々に研究機関が発表しているが、わかり易く言うと、これは一情報の話であるが、大体10年の内にＩＯＴやＡＩの発達で、今の仕事は半数以上変わってしまう、無くなってしまう。

特に、わかり易いのは、アメリカへ行くと、これだけ持っていれば、スーパーに入り、買い物をしてそのまま出でいくと、端末だけで精算が出来ている。多分2、3年でビジネスの形態も、世界のあり方、お金のあり方も大きく変わるとと思う。今の時代がこの10年先まで続くと言うのはあり得ないので、どういった社会情勢の変化があるのか、経済の変化があるのか、国際情勢の変化があるのか、こここの知見を持った集団は、絶対に把握をしておかないと、どういった化学変化を起こすかの前に、その背景がどうなのかを、我々がしっかり勉強しないと、勉強は学ばないとわからない。まず、そこから始めるのが大事だと思う。私自身は、日本の教育のカリキュラム、プログラムというものは、私はこの間10ヶ国くらい、海外の教育現場も行っており、すごいというのもわかっている。やはりプログラム・スキームはすごい、ただ一つだけ、これだけすごいのに確実にやばいと思っているのは、意識格差である。海外の若者との意識格差は、日本は負けており、現場に行き、話を聞けばすぐにわかる。ただ、先進国に行くと、少し事情があるが、アジア、中東などヨーロッパの中に、若者の学びに対する意識、何のために学ぶかという目的意識が、だからこういった技術を身につけたいという目的意識、貪欲さが、総体的に見たら非常に弱い。我々はそういった外の背景を冷静に、真摯に認識を持つと、ここだけを見れば、非常に危ういと私は思っている。

よって、教育長が言ったことは、私もそのとおりだと思っているが、まず、そういった背景を知るところから始めないと、環境は激変しているので、その中で泉大津はどういった教育をするのか、背景の考え方を皆さんと一緒に考えていかなければならない。

◆教育委員(西尾剛)仰るように、これから10年後という視点は非常に重要だと思いますが、おそらく明るい未来の展望を抱いている方は、ほとんどいないのではないかと思います。事実として、少子高齢化が進んでいき、国際情勢もいろいろ厳しいものがあり、日本がこのままずっと、安楽な生活を10年後に続けていけるのかと不安を抱いている方が非常に多いと思う。先程仰いましたように人間の仕事が、10年後もあるのかと、少し前だと「手に職を持て」と子どもに教育して、手に職を持てば食い逸れることがないが、今は、手に職を持たせても、その職が10年後も仰ったようにあるのかどうか。例えば、寿司職人等、本当に人間がお寿司を作っているのか。職人仕事も、例えば、3Dプリンタみたいのが出てきて、そんなのは要らないようになり、どういうふうにして具体的にお金を稼いで生きていけるのか、どういう指導をしたらいいのかと、なかなか難しいと思う。

実際、非正規労働者がとても増えてきて、昔みたいに就職したら安泰ではなく、大きな企業でも潰れるような時代ですから、非常に難しい。結局、人生が順調に今までみたいに、大学を卒業して就職したら、食い逸れなく平穏にいくということは、恐らくなく、有りえない。仕事自体が消滅して、新しい仕事に適応していかないと仕方がないようなものになっていくのではないかと思う。結局、そういう事態になっても、生きていく、変化出来る、対応出来る、挫けずに対応出来る力をつけていかないと仕方がないというふうに漠然としてですが思っている。

◆教育委員(藤原洋子)少し外れていることを言うかもしれないが、確かに学力だけでは生きていけない。生きる力というか、西尾委員が言われたように、対応できる力を身につけていかないと、これからこの世の中生きていくといふことがある。私達は自分が経験してきた時代しか知らないので、これからどうなっていくのか予測するのはかなり難しい。

ただ、世の中の情勢としては、こんなふうに変わっていくだろうとは考えられ、その中で、不易と流行というか、ここの世の中が変わっても大事にしていきたいというところと、世の中の流行に合わせて、それについていく力を身につけていかないといけないということがあると思う。いくら人口が少なくなつて、機械化が進んでも、人と人との世の中だと思う。だから、人の力を借りる、或いは、コミュニケーション能力をつけていく、地域の力を借りるという、そういうところは、これから先でも大事なことだと思う。学校だけの力でやっていけないところはやはり地域の人、周りの人、周りの大人達にはもっと経験し

たお年寄り達の力を借りた上で、子どもを成長させようとした時に、自分の思いを伝えられるということが出来ないと、お互いに思いを伝え、相手の言っていることを理解できる力を身につけないと上手くいかないと思う。やはり、0歳から100歳までという言葉も出来ましたが、やはり自分の思いが伝えられる子どもを育てていく、人の思いを聞ける子どもを育てていくことが、とても大事なことだと私は思う。そのために、家族も勿論頑張らなくてはいけないし、地域の方たちとの交流も必要で、そこでも言葉や思い、意見を言える機会を与えてもらい、育てていってもらわないといけないと思う。

もう一つは、自分は泉大津に生まれて、泉大津で育ったと泉大津に誇りを持てるようというところから言うと、やはりふるさとを知る、ふるさとを学ぶ、ふるさとで周りの大人達の中で自分が育ったという意識を持ち、泉大津で働くなくとも、外に出て行っても、やはりそこが原点という形で、戻っていけるところが必要だと思うし、そういう教育を幼稚園、就学前の子どもの頃からずっと学び続けていくこと、自分でここに生まれたと自信を持てるようなそういう子どもを作つて、育てていくことが大事なのではないかと思っている。また、もう少し後で。

◆教育委員（池島明子） 今、市長の方からお話をいただいた点で、私も共感できる点が非常に多かったが、まず、義務教育の中で、精神的な自立の話をしていただいたが、自分の意志や志を持つ必要がある点で、まず、同じように、自分の命をもっと大切に考え、他人の命も大切に考えられるということが非常に大事なのではないか、精神的な自立の上で、そこが私の教育の考え方というか、生きる力をつけてほしいというのが私の考えです。

もう一つは、市長が仰った言葉をお借りしますと、あの人のお蔭で、このまちのお蔭で、成長することが出来たということと共通点があるのですが、つながりの大切さ、出会いの根っここの部分、「なぜ、今、私はここに居るのか」、「自分はなぜこんなふうな生活が出来ているのか」という根っここの部分をしっかりと知ることで、それは例えば、両親が居てくれたから、両親を生んでくれた先祖が居るから等のつながりの大切さということと、命と生きる力ということを義務教育の間に教えることで、時代が変わって、自分の行いたいことが何であるのかということを、疑問に思つたり、壁にあたりそうになった時に対応出来る。それを13歳、14歳までの年齢までに十分に知る必要があるのではないかと思っている。私はまだ、自分の子どもが義務教育途中で、教育現場では大学生と接しており、大学生になる前に教えておかないといけない大切なことを日々実感している。義務教育の中ではそういうことを中心に現場の先生方にも、保護者の方にも接していただく必要があるのではないかと思い、考えている。

◆市長（南出賢一） 私なりにまとめさせていただくと、言つていただいたことは、共通認識だと思う。「不易流行」は、不易というのは普遍的に変わらないこと。ここの共通認識は大変大事だと思っており、仁・義・礼・智・信であるが、思いやりであつたり、いつの時代も思いやりとして大切にすべきもの。言うことは簡単で、明文化、言語化していくことは大事で、私もこれは賛成で、当然のことだと思っています。大体大きく分けた時に、話のカテゴリーの一つがマインド部分、皆さんが言つていただいたようなどんな状況であれ、変化対応出来る、逆に立ち向かつていける、そういうマインドの部分と、もう一つが「不易流行」は、人として大切な部分、ここを学ぶということと、やはりふるさとを知る、ふるさとを学ぶ、ふるさとの件もありましたが、この制度設計をどのようにしていくのかは、大変大事になってくるのではないかと感じました。

どういった子を育てるか、最後に池島先生が言つてくれたように、図で表したらこういうことかと思う。縦軸と横軸が育てる。これは簡単に言うと空間軸で、家族がいて自分がいる、仲間がいて自分がいる、学校があつて自分がいる、地域があつて自分がいる、泉大津があつて自分がいる、アジアがあつて自分がいる。それをリアルに実感出来る立ち位置が一つと、もう一つは先祖がいて自分がいる。お祖父さん、お祖母さんがいたお蔭で自分がいる。泉大津は実はこういうふるさとの歴史があつて、だから自分はここで生活をさせ

てもらっているのだと、日本にはこんなにいろんな歴史がある中で、自分はここに立たせてもらっているのだというのが、私は根っこだと思っている。横軸と縦軸が短い子は、感謝の気持ちちはわからないと思っている。自己肯定感も。これはあればある程、ありがとうといろいろなところに感謝が出来、お蔭さまと感謝の気持ちが出来る子であると私自身は思っていて、こういう子は幹が伸びやすい。幹とは、将来に対する夢とか目標、志だと私は捉えている。これを立てようと思ったら、横軸・縦軸、切れるところの根っこが無かつたら、上のものは、しっかりととしたものは立たないというふうに、私は捉えていて、どこの教育現場でも、言っていることは一緒だと思うが、泉大津だったら更に深まるのか、議論する必要がある。こういったことを考える時に、普遍的な話をしていると思うが、もう一度時代背景を捉まえるとかいうことをしながら、そういう認識を我々は持たないといけないし、学校の先生方も背景認識を共通にしていく。そこがあると中身が変わってくるのではないかと私は感じている。

◆教育長（富田明徳）今、委員の意見と市長の意見が融合してきたイメージで、なかなか今日は最初で、非常に良い意見交換が出来ていると思う。

藤原委員、先程の発言のもう少し後でとは。

◆教育委員（藤原洋子）具体的にどういったことをしていかないといけないかは、これからまだまだお話していかないといけないが、具体性ということがまだまだで、後でとは、この後でではなく、これから先にお話が出来たらということです。

◆市長（南出賢一）先程、先生が言っていたように、これから経済、仕事が変わってくる中でどうかということだったが、ＩＴが出来る部分と機械が出来る部分があるが、人にしか出来ない部分が当然ある。一情報はそうなっていますが、冷静にその一情報を分析する必要があると思う。

スイスに行った時の話だが、非常に考えさせられたことがあり、教育制度の話である。これは泉大津ではどうすることも出来ないことではあるが、スイスはＥＵには加盟していない。失業率は3%で、隣のフランスは20%です。そういう情勢もあるため、暴動とかいろいろとありますけれども、スイスは大変治安が良い。なぜ、3%かというとＷＩＰＯというのがあり、世界の知的財産を扱う国際機関、ジュネーブには国際機関がたくさんありますが、あそこが出している世界技術革新度ランキングというのでいくと、2年連続1位はスイスです。リノベーションが起こりやすい地域がどこかというとスイスである。一応国際機関があり、所得水準も非常に高くて、経済も顕著ということで、教育にポイントがあるのではないかと私は思い、実際に現場に行き、専門機関で勉強してきてわかったのは、初等教育卒業（日本でいう中学校卒業）の12歳の段階で、将来自分がどの職業に就くかという目標を決めている。良いか悪いかを別にして決めないといけない。決めて、次の高校の進路は、高校・大学の専門性・学術的に学ぶ道にいくのか、職業訓練校にいくのか、この2つに分かれる。なぜそうなっているのかというと、職業訓練校にいくと、5日のうち3日が技能実習、2日が座学、インターンシップにもいく。なぜそうなっているかというと、将来、資格・スキル・技術のランクに応じて給料体系が決まる。資格とか技術がないと、自分達は食べていけない。逆にいうとしっかり磨けば、よりよい高い給料が得られるという制度設計になっているので、皆、一生懸命に働く。だから大学に行ったからといって給料が高いかというと決してそうではない。大学から技術の道に行くことも出来るし、技術の道からも大学の道にも入れるようになっている。上手く目的意識を持てるような制度設計になっており、12歳までに目的意識を持てるのかということを調べたら、特にジュネーブは移民が多い地域で、かなり言語の方でしんどいらしいが、それでもどうしているかというと、キャリア教育を徹底的にする。家庭もサポートしながら、州政府のこんなイベントがあります等、12歳までに徹底的に世の中にどういった仕事があるのか、どういった人がいるのかということを、子どもの時期から触れさせる。やはり夢を持とうとしたら、どれだけいろんな仕事があるか、どんな人がいるのかということのインプットが無かつたら、

絶対に想像出来ないので、そういったことを、地域ぐるみで、将来こんな仕事につきたい、こんな人になりたいと、徹底的に行い、将来の夢を持ち、次の道に行く。一貫しているので、結果的に経済の強さに繋がっているだろうと見えた。ドイツのギルト、EUの中で経済的に強いのは、今ドイツの一人勝ちと言われているが、ドイツも同じような制度をひいてる。かつての日本も実はこういった制度のあった時代もあった。教育と将来の夢がつながっていく、こういった制度設計というのも、すごく大事で、目的意識を持ちやすい。泉大津の場合、府の教育とか、国の制度という問題が当然あるが、夢とか志を持つための条件整備というのは、地域の中でもいろいろと出来ることははあるのではないと、この数字を見ていても、海外の事例を見ていても思った。やり方はまだまだ出来る余地はあり、目標を持ちやすいような選択肢は、もっと作れるのではないかということも少し感じた。

(2) 中学校給食について

- ◎教育部長(朝尾勝次)ここまず、議題に入る前に、事務局より本市の中学校給食の現状について説明して下さい。
- ◎教育総務課長(木村浩之)中学校給食につきましては、大阪府内で未実施は、現時点では東大阪市と本市のみとなっています。

大阪府内では、自校調理方式、親子方式、センター方式、デリバリー方式と、この4方式と、選択制または全員喫食制を組み合わせ、それぞれ各市の実情に合わせ実施されています。

本市では、中学校給食については、大阪府教育委員会が平成23年6月に、中学校給食導入促進事業を公表したことを機に、本市でも導入の検討を始めました。当初は、「平成28年4月導入、自校調理方式、全員喫食」の予定で大阪府教育委員会にも報告していましたが、中学校の給食関係施設に係る面積確保等の問題もあり、引き続き、自校調理方式のみならず、センター方式、親子方式、デリバリー方式など、様々な実施方法について検討を重ねました。府教委の中学校給食導入促進事業は平成27年度までの実施でしたが、本市中学校は、東陽・誠風両校についてはプレハブ校舎を設置し、充分なグラウンドの広さも確保出来ていない中、さらに給食調理施設、デリバリーの場合の配膳室などを平成27年度中に整備することは困難との判断から、平成28年度からの中学校給食の導入を見送ったものです。

一方、平成23年に開催された「泉大津市今後の教育のあり方懇話会」の中で、「今の中学校給食のあり方」について議論され、同年12月に一定の結論をまとめています。

それによりますと、全員喫食が望ましく、実施方式は自校調理方式が最良であるが、既存施設の有効活用や維持管理の集約化など諸条件を考慮し、「親子方式」、「センター方式」についても十分検討のうえ、決定する必要があると提言されています。

また、給食が実施されるまでの間、業者弁当の販売等、学校に弁当を持ってこられない生徒に対する対応についての配慮も提言されています。

現在、生徒の昼食については、家庭からお弁当などを持参できない生徒への対応として、スクールランチの販売を業者に委託して実施しています。当初は積極的に利用されているとは言い難い状況でしたが、毎年、事業者をプロポーザル方式により選定する際には仕様も見直し、また、販売場所の変更や試食会の実施など、より充実した内容での販売となるよう努めており、徐々に喫食率も伸びている状況となっています。

現在、中学校給食については、引き続き他自治体の事例等について調査・研究を続けています。

- ◎教育部長(朝尾勝次)説明が終わりました。この件に関しまして、ご意見・ご質問等ございましたら何でも結構ですので、よろしくお願ひいたします。
- ◆教育長(富田明徳)今、事務局からの説明の件について、この間、他市町が実際に給食を始めた。先程の説明にありました本市は23年度、懇話会等の議論を踏まえていろいろ

な現状に至っているわけですけれども、現実に給食が始まっている状況で、始めていろんな課題が出てきて、報道されたりもしているわけですけれども、今回の市長の公約である中学校給食の早期実現を受け、市長からも早急に研究・実施方法を、市の現状は理解しているけれども早期実現について、早急に研究・検討してもらいたいというお話を我々は受けて、今、取りかかったところというのが現状です。

◆市長（南出賢一）なぜ、中学校給食をやるべきと考えているか、背景の考え方をまず知っていてもらう必要があるので、背景に集中し話をしようと思う。

まず、前提は子どもの自立心を如何に育むかということで、食べることに対する感謝の気持ち、若しくはたとえ給食を提供し、食育の観点から栄養のあるものを食べたとしても、卒業してから何も残っていなかつたら、全く意味がない。その時にどういう形で残してあげるのかが、本当の教育だと思う。自分達で作れる力、そういったことが余程生きる力になるというのが大前提です。給食をして与えるだけの教育ではなく、ちゃんと自立出来る子どもであったり、心を育んであげられるそういう教育を同時にしていくのが、まず前提です。なぜ、給食かという話は、人口の流出・流入の問題があり、先程、この10年で三千人減って、五千人の働く世代が減っているという事実があり、出て行く時は、どこに家を建てようか、どのまちを選ぼうかとなった時に、一つ大きいのは教育になってしまいます。どういった教育を受けられるのか、本来は教育の中身が大事だと思う。例えば、移り住む基準は人それぞれ考え方はいろいろある。昔、よくあったのは、こども医療助成費をしっかりとやっているところが一つの選択肢、追いつけ追い越せで、ある一定のレベルとなってきた。次の選択肢がないかとなった時に、特に大阪の場合は、元々、中学校給食の実施率は低く、以前の橋下知事の時に、給食の号令をかけ、一気に上がってきた。

今、これも一つの選択肢になり、働く女性も増え、給食が無いのであつたらというふうな声が、事実上がっている。私も子育て世代で、今までそんな声もなかったのが、今、上がっている。これは事実として、冷静に見ないといけない時代になった。子ども医療助成制度の時と似ていると思っている。

もし、泉大津だけ東大阪だけやらないとなつた時に、余程、他の部分で魅力がなかつたら選ばれない。これは事実として、マーケティングの観点からなっている。そこに関しては対応する必要があるだろうと思う。特に女性が多様な働き方であつたり、自己実現のために、こういった時代のために、随分と変わってきていますので、そこは冷静に、感情ではなくて見ないといけなくなつた。その観点にたつて、現実的にどうやっていくのかは、教育長と擦り合わせをやっているのですが、将来的には泉大津のグランドデザイン、公共施設適正配置の問題があります。人口が減る中、どのように幼稚園・保育所、小・中学校を統廃合していくのか、小中一貫校を作っていくのか、どことどこを組み合わせるのかということを、デザインを描き、実施をしていかないといけない時代になっている。その段階で、恐らく自校調理という最終形に持っていく必要が理想としてはあると思うが、そこへいくまでの5年、10年のスパンにも現状このまちが選ばれるかどうかは、日々かかっている。早期の実現がどういった形が出来るのか、我々が今知っている状況ではなく、例えばPPPという情報もあります。官民で実施をするという食缶方式、デリバリ方式、いろいろな方法があるので、まず1年目は、そういった時代背景を踏まえながら、まずは情報収集、学ぶことが大事で、どういった方式で実現するのか、可能性は我々だけではなく、勿論議会の議員もいろいろな方に是非、全国の事例をいろいろ学びに行っていただいて、今までにない形の実現方法が、もしかしたら見つかるかもしれない。まず、1年目は調査研究を行い、泉大津で相応しいやり方を探していく。そういう1年目にするのが大事ではないかと思い、これに対してご意見等をいただけたらと思う。

◆教育委員（西尾剛）まさに市長の仰るとおりで、それにつきましては何の意見もないの

ですが、ただ、個人的な意見ですが、全員が必ずしも給食を強制するというか、する必要はあるのかと、弁当を持たせたいというご家庭も、割合はかなり低いかも知れないがあると思う。弁当も馬鹿にしたものではなく、私も何十年前であったが中学生の時に、心に残っているのは、母親が3年間毎日、朝早く毎日起きて、弁当を作ってくれたというのが、親に感謝している。今でも記憶に残像として残っているのは、それが大きな親に対する感謝です。そういう記憶を持っておられる方も多いと思いますけれども、やはり弁当を作ることによって、親に対する感謝、或いは親孝行という面も育まれる面もかなりある。例えば、親子で夜喧嘩をしても、朝になつたら普通どおり弁当を作ってくれている。あれだけ喧嘩をしたのに、作ってくれているということは、やはり親はすごいのだと、敵わないと思うところもあるわけで、親の方にしても、中学生になると親とは話をしませんので、弁当を作つて、子どもがどれだけ食べた、残したのを見ること自体が、一つの子どもの状態、学校でいじめられているのではないか、体調悪いのではないか等の一つの指標になる。ほんの些細なことであるが会話のきっかけになると思うので、捨てたものではなく、多分親御さんの中には、そうして親から3年間、ちゃんと作ってくれて、自分も自分の子どもには、同じように朝早く起きるのはしんどいが、同じようにしてあげたいと思って作っているお母さんも何割かいらっしゃると思う。そういうどちらかというと弁当を作らないからといって、いかんとするわけではなく、教育等に関心が深いご家庭にも弁当を作つていはいけない、全員給食だと強制する必要はないのではないか、例えば選択で、1学期はお宅の家庭は、弁当にするのか給食にするのか、どうするのか選択出来るような形にしてもいいのではないかと思う。特に最近では食の安全に対する心配が皆さん高まっており、給食は安全なのですけれども、しかし保護者の立場からすると、安全な食品を使つているのか、外国産のを使つているのではないかという心配が無きにしもあらずで、自分の子どもには自分の目の届く範囲で管理したい、弁当を持たせて食べさせたいというご家庭も少数ではあるがいらっしゃると思いますし、或いはアレルギー等増えてきて、給食は万全なのですが、絶対とは言えませんから、自分の手で管理したいというご家庭もありますので、選べるような形にする方が、事務が煩雑にはなるが、導入にあたって抵抗される方もいるのではないかと思う。

◆教育委員（藤原洋子）以前に教育委員会の方で、アンケートを実施された時に、保護者の思いと子どもの思いはズレがあるという結果が出てきていたと思う。私は小学校に居た立場で言いますと、子ども達は小学校の時は、ずっと給食であり、苦手な給食でも食べないといけない状態の中で、中学校に行けば、お弁当になるという喜びのようなものを感じている子どもがいた。それは昔ですが、現実には朝食べない保護者もいらっしゃるし、朝作れない方も以前よりは増えてきている。働く人も増えてきているから、現状は変わってきていると思うが、西尾委員も言われたが、やはりお弁当を作ることがなかなか会話を交わす時間のない中学生となつた時に、子どもとのふれあい、保護者の方からいうと、一つの愛情表現と思う部分もあるので難しいと思う。給食だと皆同じものを食べ、人のことを気にしないで済むとか、作つてもらえない子ども達のためにはそれが良いという思いもありますけれども、今、アレルギーの問題もありましたけれども、報道にもありましたセンター方式ですると、1ヶ所で作つているものですから、被害が増えていき大変なことになっていることもあります。その辺の心配と中学校の時間の中で給食といったら、結構時間がかかる。配膳したり、後片付けをしたり、友達の中で安全面を上手くクリア出来るかという心配も、ちょっとは出てくるところがある。だからそういうところも、いろいろなところも考えて、これからクリアしていかないといけない課題もあると思う。

市長も1年間くらいは給食をどうするか調査研究が必要と仰っていましたが、その辺はしっかりと学校の立場から、子ども達から、保護者の立場からも、こういう実施をしていくという市の立場からもいろいろ考えて話し合いをして、結論を導き出していってほ

しいと思う。

◆教育委員（池島明子）まず、私の個人的な考えは、先程も申し上げましたが、義務教育の子どもがおりまして、藤原委員が仰った親の立場と子どもの気持ちは違うということですが、実は私は給食のある学校を選んで子どもを入学させました。それは自分がお弁当を作る負担が大変だという思いがあったということは事実です。子どもに言わせると、休み時間が短くなるから給食は嫌だということと、同じ教室で食べている子ども達も給食の日よりも、食堂を使っていい日、お弁当を持ってきていい日が混在している学校なのですが、そちらの方が評判が高いということを言っているのも事実で、それは親として子どもに逆に我慢を強いらせることになったのではないかというふうに、個人的には思っている。

市長が泉大津に相応しい方法を見つけると仰ったので、そこは安心をしているのですが、子どもの気持ちは親の気持ちは違うというので、論文でデータを探したのですが、中学生は1年生から3年生へ上がるほど、給食に対して評価が上がるらしい。それを少し考察すると、1年生は、今、藤原委員が仰ったように小学生の間ずっと給食で、また給食かというので、人気が低かったというのがあると思うが、学年が上がると、親の負担を目の当たりにすると、申し訳ないという気持ちが働くようで、そういうデータがでているという研究報告もあります。朝食の欠食も藤原委員が仰ったが、朝食を欠食している生徒は給食に対する評価も低いということで、その考察として、食に対する意識が低いのか、アレルギー等があるのか、或いは家庭環境によってなのかということもあり、そのような現状も出ています。私は勝手に朝食を欠食している児童は、給食でしっかり食べるのかと思っていたらそうではないデータもあったので、そこは自分が食べたいのを食べる必要があるっていうのもあるのかと思いました。小学校の間は好き嫌いを無くすということも、給食という制度の目的の一つかと思ったのですが、エネルギー摂取を必要とされる中学校の時に嫌いなものも食べないといけないという状況があった時に、教員は残さず食べなさいということを言えないような教育の現場だと思いますので、給食の制度だと男子の食べる量と、女子の食べる量の違いですとかもあるのではないかと思いました。昨年6月に、大阪市の中学校に教育実習の巡回指導に行かせてもらった時に、給食も一緒に食べさせて下さいと頼んで食べさせていただきました。その時に一番感じたのは、先生方がすごく大変だなと思いました。準備をさせるのも同じように行い、先生も一緒に教室で召し上がってましたが、そんなに大変だが学生は助かっているのかと思ったら、全く箸をつけない女子学生が居た。「今日は体調が悪いの」と聞いたら、嫌いなものが多すぎて食べる気にならないと言ったので、先生に聞くと、「この子はいつもそういうのです。白ご飯を半分食べるだけで、全て食べられないのです」というような子どもさんも居て、子どもが嫌がる、食べられない物というのが、嗜好がどんどん固まっていくのかもしれないが、その状況でもお弁当を持ってきてはいけないということだと、エネルギー、栄養バランスとしてどうなのかということを、大阪市のある一部であるが拝見して思うことが多かったというのが私の感想です。

あと、もう一つ、給食のない地域で支給される生活保護なり、就学援助費等の問題もあり、給食費の負担があると言っている児童もいました。それは生徒が私に言いに来て、「給食はどう」と聞くと、「いや、親からな、給食費大変やねんでって言われる」、「弁当を作る方がお金的に楽だと言われて、僕は辛いんや」というふうに言っているようなお子さんもいたので、子どもの気持ちは様々だということを感じました。一部のデータと個人的な考えなのですが、選択制があるのはいいと、西尾委員と同じですが、月・火曜は給食だけれども、水・木曜は自由に持ってきてもいいとかいう制度の方法もいいのか、是非泉大津に相応しい方法が見つかるといいというふうに考えている。

◆教育長（富田明徳）給食の実施方法というのは、先程事務局が説明がありましたように、いろんな方式と、全員喫食か選択かという方法がありますので、市長から先程ありまし

たように1年間しっかり調査研究しようとあったように、どういう形が望ましいのか、懇話会の時は、私は居なかった時であるが、泉大津で行われたアンケートや懇話会を作った5、6年前の話でも、やはり弁当を作るのは大事だというのが議事録を読めば出てきたというのもありますし、今の池島先生のリアルなお話も、子どもがどんどん嗜好にはしっているという現状で、残食の問題があります。沢山食べない物だから残ってしまう、無駄になってしまいうといそも大きい問題でもあります。給食を実施する場合に、どこにもやっていない方法があるのではないかと、どこにもない方法というか、そういう工夫というのがないかと、これは市長のご意見もありますので、一律に本市としても、元々は自校調理の全員喫食というのが理想だというふうに、当時そういう提言もいただいているものですから、思ってきましたが、捉われずに研究していくべきではないかというふうには思いました。

◆市長（南出賢一）考え方は教育長と一緒に、良い部分もあれば、デメリットになりかねない部分も当然出てくる。まず、対峙すべき物の見方のポイント、背景的見方は、教育と同時に、まちづくり戦略を考えないといけない。人口の問題等いろいろな見方とか、いろいろなまちづくり戦略を外してはいけない。例えはあるが、選ばれるまちになる、税収が増える等は、為政者としては絶対に外せないということが一つ。もう一つ漏らしてはいけないのが、子どもの自立であったり、心の育みに資するかどうかというところを常に持ちながら、いろんな選択肢を考える。この2つは持ちながらどういった選択があるのか、やることが目的ではないので、そこはちゃんと持たないといけないと思う。私は元々、給食はなくともいいのではないかと、昔思っていた。むしろ今、先生が言つていただいたように、親子の会話も大事だし、要るのではないかと思っていた。それはまちづくりの流れ、まちの選ばれ方、もう一つ言うならば、少し視野を広げたならば、時代背景の話で、今、所得は下がっている。裕福なところ、旦那さんの所得だけのところは、確かにこういった結果が出やすい。しかし、共働きをしないと、生活をやっていけないというのが、大きく増えて、意見は実は割れる。所得層が高いところは、言つていただいた意見が多い。所得層が低いところになると、そんなのは共働きでないとやっていけないというのが、現に増えているのが一つ。よっていろいろな要因、立場によって、背景によって、考え方は当然違いますので、そこは冷静に見極めながら、やっていく必要があるのと、配膳時間は、当然やるとなったら凸凹といろいろ出てきます。そこも現にやっているところもありますので、そこをどうやってクリアしていくのか、考える必要がある。視野を広げてみていくと、面白い。秋田県、福井県等は共働き率が高い、子どもの自己肯定感高い、世帯収入も多い、学力も高い等。いろいろと冷静に見ていけば、対峙すべき点はないかと、勿論地域性等いろいろあるが、そういった背景的考え方、時代の流れ等、そういったのも一つ一つ分析をしながら、教育長が言つていただいたが、どういう形がいいのか、これと縛られずに、皆さんと意見交換しながら定めていけたらいいと思っている。

(3) 読書量日本一のまちづくりについて

◎教育部長(朝尾勝次)ここで、議題(3)読書量日本一のまちづくりについてですが、先に事務局より本市の図書館政策の現状について説明して下さい。

◎教育部次長兼生涯学習課長(丸山理佳)本市の図書館の現状について説明いたします。本市の図書館は、昭和58年3月に建設され、築33年が経過しています。

運営は直営で、一部窓口業務を図書館流通サービスに委託しており、現在正職員の配置はなく、職員体制は、再任用職員の館長が1名、非常勤嘱託員の司書2名、OB職員2名、臨時職員の司書が1名の6名体制で、主に本の選定や内部事務を行っている状況です。

図書館運営に係る事業予算ですが、維持管理を含んだ図書館費として年間約4,700万円を計上しております。

また、平成27年度の蔵書数は約23万冊で、市民一人当たりの蔵書数は3.1冊となっております。

平成25年度からは、堺市・高石市・和泉市・忠岡町と広域での図書相互借入サービスを実施しており、泉大津市民の方の泉北地域4市1町の図書館利用が可能となりました。

また、平成26年10月から地域の方々を中心に戎小学校の図書館を、週1回、土曜日の午前中に開放しています。さらに平成28年12月から条東小学校の図書館においても、月1回土曜日に「土曜図書館」として、地域開放を開始している状況です。

なお、現在「子どもの読書推進計画」を(仮称)生涯学習推進計画に包含して策定中であり、計画の策定経過において、ワーキングを行いました公立図書館司書や学校図書館の司書ボランティア、読み聞かせを行っている市民団体等が集まって実施したWSにおいて、貴重なご意見をいただきしております。今後、読書に関する関係者のネットワークづくりや公立図書館と学校図書館との連携、学校図書館の地域開放など、計画的に実施する予定でございます。

◎教育部長(朝尾勝次)この件につきまして、何かご意見等がございましたら、お願ひいたします。

◆市長(南出賢一)先に私から、背景的な考え方をお話します。これは全国学力状況調査の中でも、泉大津の結果も毎年出ておりますが、やはり国語力B問題がしんどい。教育長始め皆さんが頑張っていただいて、改善傾向にあるのですが、いろいろ分析をしていくと、やはり語彙力というところが、必ずポイントになってくる。読書量が上がるのは、すごく大事だと思っている。なぜその語彙力というのが問題になってきているのかというと、時代背景をいろいろと分析をする必要がある。一つは活字離れ、ITというのがあると思うが、もっと歴史的に見ると、いろんな問題がある。これも事実史実として残っています。戦前まで日本の漢字は三千字から四千字ありました。それは占領政策があり、その後に、千八百五十字まで減らされたというのが史実として残っている。千八百五十字まで減らされて、当面用いていい漢字、当用漢字となった。あの時に全部残っていますが、日本も元々ローマ字に変えてしまえという話も出ていた。だから当面用いていい漢字として千八百五十字は認めますと、あの時に実は漢字の内容も変わっている。例えば、雑談程度で、これは溶岩です。これは元々火偏だった。例えば「雪」という漢字は、元々これは突き抜けていたのです。これはどういうことかと言ったら、溶岩はさんずい偏ですが、イメージは少しおかしいですが、火偏ならイメージが出来ませんか。ちゃんと言葉とイメージが認識出来るものであった。雪はなぜこのようであるのかは、雪というのは手に平にのせると、雪は残り、雨は流れる。これは手のひらに問題がある。例えば、筆という字がある、これは竹の筆を手で持っているイメージ。漢字には意味があり、こういった一つ一つ見ていくと、言葉は大事だと思います。

漢字、言葉の数がすごく減らされているというのが一つと、データを見ていただきますと、言語脳学者が出しているデータですが、これは左側が年齢で、こちら側は蓄積語彙量の数、年間の増加率です。これを見ていただくとわかるように、8歳から11歳が言語を獲得出来る脳のゴールデンエイジと言われている。この時期は語彙を獲得しやすい年令なのです。年令がいくと獲得率が上がってくる。これは年齢で獲得していたことがわかる。こういったいろいろなデータがあります。この8歳から11歳までにどれだけの語彙を獲得できるかということがすごく大事である。今、文科省の方針は教育指導要領に則って、指導しないと駄目ですが、文科省の方針を調べると、言葉と意味をセットで教える、意味のわからない言葉は子どもには相応しくないという教育が主流です。でも、よくよく考えたら、子どもの頃は経験が少ないので、辞書で調べても何のことかわからない。我々はいろいろ経験しているから、調べたらわかると思うのですが、そうこうしている内に、脳のゴールデン時を過ぎる。どれだけの意味がわからなくても、音で聞くか、言葉になる。お父さん、お母さん、周りで話す人の言葉を、耳で聞いて話すか、読むか、それだけ文字に触れられるかとなった時に、今の家庭環境、向こう三軒両隣という環境も減っている。言葉に触れられる、いろんな言葉に触れる幼少期の背景が無くなっているという、今の教育の問題、いろんな複合的な問題があるかと思います。

ここまでどれだけの言葉を耳から聞くかという、音読をするかという、読むかと、目で見るかと、それがすごくポイントになってくると背景としてはもっています。

根本的にそこを解決しようと思ったら、冷静に、歴史的な流れとか、こういったものも参考にしながら、どれだけ言葉に触れられる環境をつくるかという、今、教育長は図書館のソフト面の政策であったり、ハード面をどうするのかということを、全国私費で行かれながら、学んで来て、その報告書をいただいており、こういった背景を捉えながら、教育の方向を冷静に見ながら、対策を練っていく必要があるというのが背景です。言語は文化そのもの、「いただきます」、「お疲れ様」、「勿体ない」、「お陰さま」は、日本の言葉は日本人のアイデンティティそのままを育むことが大事なのです。「切ない」、「侘び寂び」、「素心」などいろいろあります。言葉がなぜ大事かと、皆さん勉強だと思って、これは日本の伝統色ですが、例えば、紫一つとっても、はかりしれない数がある。これが紫一つしか知らなかつたら、これは全部紫になる。言葉で「江戸紫」、「京紫」等、言葉をわかって、それが共通言語となつたら、物は伝わります。実は日本のものづくり等、日本の感性、細かい部分まで表現出来るというのは、根底には言葉の力、語彙量というのが絶対に影響している。

これは日本の文化力、技術力、表現力といったところにも、言葉がちゃんとなかつたら認識出来ない。言語があることで、そういった表現力にも繋がる。例えば、これは雲ですが、秋の雲で、鯖雲、鰯雲、鱗雲といろいろありますけども、これも言葉がなかつたら、それぞれいうことがバラバラ。こういった微妙な変化の違いを言葉で表せるだけの語彙量は、日本人は豊富だと、これら文化力、ものづくり力に全部つながっている。それだけ言葉は非常に大事だとなつた時に、語彙量を如何に獲得するかということが、非常に大事。こういった背景的な考え方を、持つた上でいろいろ考えていかないといけないのではないかと思っています。

これはエスキモーです。例えば、これは雪という言葉だけでも、52種類あると言われている。なぜか、溶かしたら飲める雪、建築用に使う雪等これは生きていく術です。この言葉がお互いに理解出来ないと、生きていけない、厳しい環境だから、言葉が発達している等、言葉というものはその民族のそのもののアイデンティティに非常に繋がるのだなど、だから言葉は大事だとなつた時に、英語圏も大事であるが、根本は日本語教育がとても大事であると思っている。言葉が人格を作る等いろいろあるが、それを話していくときりがありませんので、そういう観点に立つた時に、泉大津の図書館の現状を見た時に、非常に何とかしたいと後ろで聞いている方も頷いてらつしやるが、力を入れるべきで、ただ単に力を入れるのではなく、こういった学力の根底にもなり、もっと言えば豊かに生きるもの、ゆくゆくは技術力、日本の文化力、こういったところの根底を為すものなので、如何に本に親しむかがすごく大事だ。そうなつた時に、読書量日本一のまちづくりをどのようにめざすのかという話になってくるのですが、まちづくり戦略として考えて下さい。私は、世界と日本全国をこういった問題を抱えながら、勉強しながら飛び回ってきたものですから、今日は少し、皆さんがどう思つていただいても構いませんので、一つの参考として、ぜひ見ていただけたらと思います。これを見て下さい。

これは600ページの本ですが、私が読んでいた本を高校一年生の男子が、何の打ち合わせも無しに直接渡した状態です。これは何を言っているか聞こえにくいのですが、要約をしている。説明しますと、この子は本を逆さまから読んでも、後ろの頁から読んでも、同じ事を言う。意味がわからぬと思いますが、小学校3年生から皆さんがあんまり並んでいたり並んで、本を読んで、山積みにして、今のように本をサーッと読んで楽しく表現をする。アウトプットで毎回毎回という教育を泉大津で、泉大津の民間事業者がやっており、全国的に有名な教育者等ここになぜこんな事が出来るかと学びに来ている。そういった現場が泉大津にある。これを見るだけなら何もわからないと思うし、一つだけもっておきたいのは、先程、藤原先生が言つていただいたように、我々は自分が見てきた、聞いてきたものが、正しいと思つてしまうので、こういったものを見た時に拒絶反応を起す。自分の経験からはあり得ないと思つてしまう。ただ、世の中は決してそうではないと、特に我々教育に立つものですから、一度こういったものを素直な、自分達が見てきたものが常識ではないので、一度こういったものを見に行くのはすごく大事ではないかと思っています。

ます。泉大津にはこういったものが、偶々やっていて、全国的に非常に注目されているので、こういったものが、例えばですが、子どもがいつでも触れられる、勝手に本が好きになる、そういうことが出来ると非常に泉大津の中でも、こういったものに外から触れたい、読書量日本一をめざす、戦略的にこういったことが出来るのか、学術的に研究したいというのが出てきています。大企業は既に目をつけています。この件にどうするかとやり出しています。泉大津でこういったことがあるのであれば、こういったものを、まちづくり戦略に取り入れながら、子ども達にも触れてもらえる環境を作る。読書に親しんでもらう、読書量を増やす、語彙力が増える、学力は上がる、結果的に感性が上がる等、良い本に触れていただき、いい生き方をし、養い、心豊かにしていたく、そういうことをどこかの自治体が目をつけてくる。泉大津で行うなら、活かしていく研究を始めていくと、本当にこのまちで教育を受けたい、こういった教育を受けられるのなら受けに行きたい、学びに行きたい、そういう戦略的なことをやっていくと、読書量日本一のまちづくりは、私は出来るのではないかと、そういう大きな視点に立って、ある素材を掘り起こして、活かしていくというのが大きな観点から大事ではないかと、教育長が考えておられるハード面、ソフト面とこういったものを組み合わせながら、あらゆる可能性から模索していくのが、これからまちづくりの生き残りをかけていくのに、大事だと思います。

◆教育委員(藤原洋子)先日、新聞で見たのですが、全国大学生活協同組合の調査があり、大学生の1日の読書時間がどれだけかというと、0分、全く読んでいない大学生が大体5割くらいいる。平均すると1日に24.4分しか本を読んでいない。それに代わってスマホはどうかというと、1日に161.5分スマホに触れているという結果があった。読書量日本一のまちづくりは横において、本を読むことによって得られる効用、効果は今、市長が仰られましたが、たくさんあります。ところが、今、本を読む環境にあるかというと、なかなかそうとは言い切れない。例えば、スマホ、携帯、ゲームがあり、安易に一人で遊べる、楽しめるものがあり、忙しさの中で、塾通い等放課後の時間を使わないといけない、そういう忙しさの中で、本当にゆっくりと本に親しむ時間が取れるかというと、なかなか家庭の中でも保障されていない。親はどちらかというと、本を読んでいない環境もたくさんあり、習い事に行ってくれている方が助かるというところもある。

また、学校で過ごしている時間が以前よりも増えてきました。学校で学習する時間も増えてきています。あともう一つは、周りがざわざわ音に囲まれている世の中で、本当に自由に過ごせる時間が短くなっている。静かな環境、落ち着いた環境が、少なくなっている現実がある。それでもやはり本から得られるものは大きいし、今言われていた語彙力が、自分を表現するために、自分の考えをまとめるために、相手に伝えるために絶対に必要です。そういうのは、小さい時から、小学校の8歳からと言われていますが、それよりもっと前からでも文字に触れ、絵本で十分大丈夫ですけれども、こういったものに触れ、遊びの中でも文字を書いているものがいっぱいありますから、そういう環境を作つてあげるのが大事ですし、図書館も身近にあれば、もう少し行きやすいのではないか、自分が行き慣れた所にあれば、行きやすいのではないかと思う。読書環境をハード面からも地域の中に、地域の身近な所にもそういうものがほしい。今、小学校が2校ほど月1回開放されていますけれども、例えば、公共の公民館、おてんのう等そういう場所で、そういう本を読める場所が、元々自分が行きやすい場所という所で作つてもらえたなら、学校ももっと開放出来る場所を増やしていくべきだ。そうしたら、地域の仲間づくりも出来、普段のつながりも出来、大人と子ども、高齢者と子どもとのつながりも出来てきますので、いろんな面でプラス面があるのではないかと思う。

もう一つ言うと、大人が本を読んでいる姿勢を見せるのは大事かと思う。子どもに本を読めと言つても駄目で、やはり自分も本を読んでいる姿を見せる、一緒に同じ本を読んであげるという環境も大事で、読みたい本、読ませたい本を整えていってもらいたい。読みたくなる、使いたくなるような施設を作つていただけたら、もう少し子ども達が本に親しめるようになるし、大人も本を読むことが出来るようになるのではないかと、全体としてレベルアップしていくのではないかと思う。

◆教育委員(西尾剛)私は普段あまり本を読まないのですが、実際の問題として情報を取るだけであつたら、ネットで大概の情報が取れてしまい、そこでわからないのを図書館に調べに行くかとい

うと、行っても本があるかどうかわからないし、単に情報を取ることだけを考えると、図書館も段々利用されなくなっていく、情報もタダみたいなものですから、良書に親しむという意味から、単に情報を取るだけではなく、心を養うという意味での読書は非常に大事だと思う。自治体の図書館でも時々見るので、大体置いている本は、HOW TOもので、実用、旅行、盆栽の育て方等古いのがいっぱい並んでいて、全然役に立たないというのが大雑把な印象です。泉大津図書館は建物自体も相当古いですから、建物自体もきちんとする必要があると思うのですが、問題はその品揃えで、先程申したように、HOW TOもの、旅行ものを揃えてもすぐに古くなって、役に立たなくなるので、そういうのはそれぞれ市民の方が自分で買っていただくなり、ネットで調べるなりして、本当に良い本でもなかなか売れないから本屋に売ってない本を取り揃えていけば、それで来館者が増えるかどうか分かりませんが、泉大津に文化を育てる上で価値があるのではないかと思う。

◆教育委員(池島明子)読書量日本一のまちづくりの中で市長が仰った語彙力の問題ですけれども、私は昨晩まで、南相馬市の方に復興支援で大学生を連れて1週間ほど行っており、学生とずっと食事をしていたのですが、この子たちは単語でしか喋らない。「やば、やばい」はそれは美味しいの意味。「美味しい」、「すごく美味しい」、「熱い」、「嫌いなものが入ってる」、「全て美味しいものが入っている」の「やばい」、嫌いなものが入っていても、熱くてもやばい、皆同時にやばいと言うのですが意味が違うというのが現状です。

語彙力を育てるというのが、仰っているようにすごく大事だと思います。是非に図書の整備等をお願いしたいのですが、彼らに言わせると、何でもネットで調べる。簡単に調べられたことは簡単に失うので、もう少し苦労して調べないと結局何も身に付かないと、日々学生には言っているが、そう言つても、簡単な方を選んでいる状況で、やはり少し苦労するというか、今見せていただきました超速読というのも興味深いと思うのですが、本の行間を読むと言いますか、読んだものをもう一度戻って「これはどうだったか」というような背景のようなものを、時間を、苦労したことで簡単に失くさずに残るのではないかと思う。例えば絵本を読む、ラジオを聞くことが、目の当たりにしたことによって想像力が養われ、好奇心が生まれるということがあるのではないかと思うので、語彙力を育てるということと共に、いろんな本を読む、接するということはすごく大事なことだと思う。読書量を増やすというターゲットが子どもだけではなくて、中高年の方にもターゲットにしていることが、認知症予防等の刺激にはなるのではないかと思うので、先日、教育長とも話をしていたが、お薬手帳のような手帳を子ども達に配布することであったが、高齢者の方にもしていただきと、本を読んで、いつどうであったかということを書くことも脳の健康にも良いのではないかという話をしておりましたので、大人の方がなかなか図書館に行くという時間は忙しいと思うが、電子媒体で読むのではなく、読んでいる姿を見せる、一緒に行こうねという機会を、コンビニや食事に行くだけではなく、図書館に行くということもすごく大事で、そういう意味で、市民が足を運んで、三世代、二世代一緒にいくというような場面が出来れば、読書量も増えると思う。

◆教育長(富田明徳)市長から図書館をいろいろ見て回っているという話があつたが、今回、読書手帳を、先程池島先生の方から紹介していただいたが、子ども達に配布しようと、この充実を図ろうと思っているが、やはり見に行つたところには、市長もいろいろ見てらっしゃるが、良いものを見るとすごい、我々もいろんな所で知っている以外のアイディアがあつて、子ども達が本に親しむのなら、マタニティ読書手帳をやっている所もあつて、やはり、お母さんが本に親しんでいると、子どもも当然自然と親しむようになる。その足掛かりとして今回スタートさせていただく。先達で、オーストラリアに行かせていただいて、私は是非とも図書館に行きたいということで、オーストラリアのジローンの図書館に行ったのですが、ジローンの図書館は、コンクールで世界で4位になる立派な図書館で、建物としてはそれ程大きな建物ではないが、情報センターであり、郷土資料室、郷土の資料がいつでも見られるという史料室、図書館、子ども達の居場所でもある。いろいろな工夫をされた図書館で、一番充実しているのは、キッズスペースが就学前までに1,000冊本を読もうというキャンペーンをやっていて、「1,000冊読むのは大変ですね」と聞いたら、子ども達は同

じ本を何回も、覚えるくらいに読みます。それもOKで、先程、西尾委員の方から、HOW TO本や旅行の本等は、大人で買ってもらって、それはいろいろあると思うが、本市の規模であると、児童書・絵本等子ども達の気持が搔き立てられるような本を中心を持つ。大都市の何から何まで本を揃えているのではなく、ある意味特化して、こういう類、子どものための本なら、泉大津へ行けば多様な本があるのだと、同じお金をかけるにしても、そういう工夫をしたら良いのではないかと、今後いろいろな本の楽しみ方を考えていけたらいいと、市長とも意見交換しているところです。

◆市長(南出賢一)いろいろとご意見をいただく中で、今の話は最初の話に集約されてくると思う。本を読む子は親が読んでいる、本に触れられる環境がすぐ傍にある。例えばこれは長野県小布施町というところで、「まちとしょテラス」、「まちじゅう図書館」という取り組みをやっており、まち中を図書館に見立てて、いろいろなところ、お店・空き店舗等を使って、まち中を図書館、分散させて本を置く。ここは哲学書中心、ここは子どもの本中心等、まち中歩けば図書に触れられる環境を作る取り組みをしているところです。こうやって工夫をしているところがあったり、図書館はハードだけでなく、ソフトも、マタニティ図書をやるだけでなく、まちづくり戦略として図書館を考えるべきではないかと思う。蔵書をどうするか等いろいろありますが、今、結果的にこういうことを、背景的なものを目指すべきもの、何を大事にすべきかを擦り合わせながら、方向性を出すことが大事だと思うのですが、先程言っていたインターネットが普及して情報が簡単に取ることが出来る。先程お話していただいた「やばい」の一言で終わるのは、とても危機感がある。情報がこれだけ溢れると人間は振り回されやすい。逆に言うと不安に駆られやすい。こっちと思ったらこっち、流行で飛ばされる、不易流行は何がいつも時代も変わらないものかとわかっている等、おそらくここで一つのキーワードになると思うのが、哲学。「生きる上で何を私はすべきなのか」、「どう良く生きるのか」、「如何に生きるのか」という哲学をしっかりと養う教育を行えば、情報の取捨選択が出来ると思うので、自分で消化吸收、噛み碎くことが出来る。今でも、世の中HOW TO本、生き方もHOW TOばかりなので、そうではなく如何に生きるのか、何を大事にして生きるのか、共通言語にあって、しっかりと生き方を磨きましょうということを、先生も親も我々も、共通認識しておけば、情報も取捨選択出来る、振り回されず、自分らしく生きることが出来る。結果的にこの大切さを如何に皆が気付くか、気付いてもらうかというところを根底におくことが、いろいろな教育を積み上げていく上では、土台になるかなというふうに、今日話をしていて、結果的にここにきたのではないかと、私はとても感じています。ここは答えが出ないので、なかなか難しいと思うが、その辺を我々もいろいろな大人が、共通認識でまず持てるような組織、土台を作る上に図書館政策、学校教育等いろいろと積み上げていくと、これから素晴らしい教育は皆さんと力を合わせれば実現出来ると思いましたし、表面的な意見交換は高まった等いろいろありますが、是非これから一つ一つ良いものを作っていくために、私も尽力していきたいと思いますし、最後に私は為政者ですので、如何に財源を確保する、継続させるかが、根底になかったら出来ない。だからこそ、既にまちづくり戦略を念頭においています。こういった考え方も、側面で大事で、これから思いを擦り合わせながら、いろいろな事が実現出来る素地を作っていくたいと思う。

※「意見交換」終結

午後12時02分終了